

ダニエル書 - 第九十一号

預言の川をひも解く：ダニエルの幻における展開のつながりをたどる旅

Jeff Pippenger

2024-02-24

第一の天使の運動において封印が解かれた知識は、ダニエル書のウライ川の幻によって表される。その幻はダニエル書の第7章、第8章、第9章を表しており、第三の天使の運動において封印が解かれた知識はヒッデケル川の幻によって表され、それは第10章、第11章、第12章を表している。二つの運動の間には多くのつながりがある。二つの運動は、1863年の反逆から1989年の終わりの時までの126年によって結びつけられている。

各運動における二つの「終わりの時」は、レビ記26章の「七倍」によって示されている。異教と、続く教皇制は、1798年の「終わりの時」に至るまで、聖所と軍勢を踏みにじってきた。1863年の反逆から1989年に至るまで、エゼキエル書8章の四つの忌むべきことによって表される霊的な踏みにじりが起こっていた。

最初の忿怒の終わりから、1844年の最後の忿怒の終わりまでの46年間——その期間にキリストは霊的な神殿を築き、1844年10月22日に突然その神殿にお入りになった——は、1989年の「終わりの時」から間もなく到来する日曜法に至るまでの時期に対応しており、キリストは再び霊的な神殿を築いておられ、黙示録11章の大地震の時にその神殿に突然来られる。

1844年に第三の天使が到来したとき、契約の使者はレビの子らを清めるために突然現れた。だが1863年までに、その不忠実なレビ人たちはエリヤによって届けられたモーセのメッセージを拒み、荒野をさまようようになった。その試練の過程において、「家を建てる者たち」は最終的に「七つの時」の「隅の石」を退け、そしてフィラデルフィアの運動からラオデキアの教会へと移行することになる。終わりの日には、間もなく来る日曜法の時に、契約の使者がご自分の神殿に突然来られると、彼は忠実なレビ人たちを用いてご自分のほかの群れを呼び集める。終わりの日の忠実な者たちは、「ラオデキアの教会」から「フィラデルフィアの運動」へと移行しているだろう。

第一の天使の運動は、欽定訳聖書が出版されてから二百二十年後にその定式化されたメッセージを公表し、第三の天使の運動は、独立宣言が発表されてから二百二十年後にその定式化されたメッセージを公表した。両運動の定式化されたメッセージは、天使の降臨によって印づけられたイスラム教の預言の成就によって力を与えられた。天使の到来は、ハバクク書第二章の「論争」の始まりを示し、ハバククの表の出版へとつながった。

ハバククの表によって表された力あるメッセージは失望へと導き、それが遅れの時を招き、それが真夜中の叫びのメッセージへと導き、そして真夜中の叫びのメッセージの成就によって締めくくられた。二つの運動の間に存在する類似は、見ることを選ぶ者にとって、ミラー派の歴史のすべての要素が十四万四千人の歴史に結びつき、またその中で繰り返されることの決定的証拠である。後の雨の時期はミラー派の運動において型として示され、フューチャー・フォー・アメリカの運動において成就している。靈感は、聞く意志

のある者たちに対し、後の雨を認識する者だけがそれを受けると繰り返し告げている。

後の雨の時期、運動、そしてメッセージはすべてミラー派の歴史の中に表されており、「recognize」という語は、以前に見たものを見てそれとわかることを表している。後の雨の時期・運動・メッセージを見る唯一の方法は、それがミラー派の歴史において例証されていることを認識することである。それは他の聖なる改革運動においても例証されている。ミラー派の運動は、終わりの運動を表す始まりの運動であり、ゆえに先行する改革運動よりもはるかに多くの直接的な言及を有している。また、それは、物事の終わりをその始まりによって常にお示しになるアルファでありオメガである方のしるしをも帯びている。

ミラー派運動において土台が据えられ、中心の柱はダニエル書8章13節と14節であった。私は、ホワイト夫人が14節を中心の柱であり土台だと位置づけていることを承知しているが、実際には、14節は13節の問いに対する答えである。答えを引き出す問いを理解しなければ、答えは空虚なものとなる。13節は、二つの荒廃させる勢力によってなされる蹂躪の幻を明らかにし、14節は、踏みにじられた聖所と軍勢をキリストが回復する幻である。二つの幻は、文脈と文法、そして不思議な数える者であるパルモニによって、直接結びつけられている。

ウィリアム・ミラーは、基礎的な真理を指し示すために用いられたが、それはダニエル書第8章13節と14節である。彼が見いだした最初の宝石は「七つの時」で、これは13節の踏みにじりを表している。そして、彼がその預言的構築物全体を築いた枠組みは、13節に表されている「二つの荒廃させる力」というモチーフであった。ミラーは、13節の「the daily」という忌むべきものが異教であり、荒廃させる力の「背き」が教皇主義であることを正しく見抜いた。この意味で、ミラーの枠組みのまさに「基礎」、そして基礎と中心の柱の「基礎」は、8章の「the daily」が異教を表しているという理解であった。ミラー派の歴史における知識の増大の土台は、ダニエル書8章の「the daily」が異教であるという点にあり、また「裁きの時の叫び」を告げた者たちは「the daily」について正しい見解を持っていた、と靈感は慎重に明示している。

1989年における「終わりの時」に「知識の増加」として表された光の土台は、また「the daily」でもある。それは単にもう一つの神的なパラレルにすぎない。ダニエル11章の最後の6節に表されている「知識の増加」を認識するためには、エレン・ホワイトの著作を用いることが必要である。彼女は著作の中で、ダニエル11章31節の歴史が、同章の終わりの諸節で繰り返されることを指摘している。その靈感による手がかりがなければ、31節と40節・41節の平行する歴史を理解することは、はるかに困難な作業となるだろう。

ダニエル書における“daily”は異教を表しており、ミラー派にとっての基礎の基礎であり、また十四万四千人の運動のためのメッセージの基礎でもある。それはまた、ラオデキア的アドベンチズムの第三世代に持ち込まれた「偽り」によって、意図的に誤りへと変えられた真理でもある。この第三世代は、エゼキエル書8章の第三の忌むべきこと「タンムズのために泣く女たち」と、第三の教会であるペルガモに象徴される妥協によって型示されていた。

「後の雨」の時ににおける「日々の務め」という争点の役割を導く神の導きは、まったく驚くべきものであり、人間の作為の及ぶところではない。ラオデキヤ的なアドベンチズムの第四世代は太陽にひれ伏すものとして描かれており、それは獣の刻印を受け入れることを表している。ホワイト姉妹は、その刻印を受けるとは獣と同じ精神に至ることであり、反キリストの意味について混乱する者は、最終的に不法の人の側に立つようになると指摘している。これらすべては、エゼキエル書第八章におけるエルサレムの長老たちによって表されている。

第三代と第四代において神はご自分を憎む者たちを裁かれ、その裁きは、他方の人々が神の是認の印を受けている間に執行される。ダニエル書で「the daily」として表されているものが異教ローマであると彼が認識するために必要な光をウィリアム・ミラーに与えた、まさにその聖書箇所は、エゼキエル書8章で長老たちが礼拝する「不法の者」を最も直接的に指し示している。その章は、第二の荒廃をもたらす勢力の教皇を特定すると同時に、第一の荒廃をもたらす勢力の異教性も明らかにしている。そして、その箇所の主題となっている真理は、異教ローマの役割であり、テサロニケ人への第二の手紙においては、538年まで教皇権が玉座に上るのを抑える力とされている。

“daily”はミラーの岩盤の真理であり、聖所と軍勢を踏みにじる二つの荒廃の力に基づく予言の枠組みを彼が構築することを可能にした。その“daily”こそ、パウロが、退けられる真理として、また終わりの日にまさにその真理を愛さない者たちに強い惑わしをもたらす真理として特定したものである。並行する歴史とも一致して、そのまさに同じ、すなわち岩盤の真理が、終わりの日の最後の三重の連合に関する予言の枠組みをFuture for Americaが構築することを可能にした。

それだけではない。両方の並行する歴史にとっての基礎的真理であるその基礎的真理が、二度と声を上げて神の民にその背きを示すことのない人々によって宣べ伝えられる、偽りの後の雨の「平和と安全」メッセージの枠組みのために、根底的な誤りとなり、パウロの言う「強い惑わし」ともなる「偽り」へと仕立て上げられている。「the daily」は、第一の天使と第三の天使の運動の双方の土台を表しているが、ラオデキヤの反逆者たちがその意味を転倒させ、サタンの象徴をキリストの象徴と見なしたとき、その偽りの象徴が、偽りの後の雨の模造メッセージの土台となった。

立ち止まって、驚け、叫べ、さらに叫べ。彼らは酔っているが、ぶどう酒によってではない。彼らはよろめくが、濃い酒によってではない。主があなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉ざされたからだ。あなたがたの預言者と支配者、すなわち先見者たちの目を主は覆われた。すべての幻は、封をされた書物の言葉のようになってしまった。人々がそれを学のある者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は言う。「読めません。封じられているからです。」また、その書は学のない者に渡されて、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は言う。「私は学がありません。」それゆえ主は言われた。「この民は口でわたしに近づき、唇でわたしを尊ぶが、その心はわたしから遠く離れている。彼らのわたしへの恐れは、人間の戒めにより教え込まれたものだ。」それゆえ、見よ、わたしはこの民のうちに驚くべき業を、まことに驚くべき業と不思議を行う。彼らの知者の知恵は滅び、思慮深い者の悟りは隠される。主からその計りごとを深く隠そうとし、その行いを暗闇で行い、

「だれがわたしたちを見るのか. だれがわたしたちを知るのか」と言う者たちにわざわいがある. まことに、あなたがたは物事をさかさまにしている. 陶器師を粘土と同じに扱うというのか. 作られたものが、それを造った者について「彼はわたしを造らなかった」と言えるだろうか. 形づくられたものが、それを形づくった者について「彼には悟りがなかった」と言えるだろうか. イザヤ書 29:9-16.

すべての預言者は終わりの日々について語った. そして、「the daily」の意味をひっくり返すために公然と嘘をつくことは、赦されない罪の定義をほとんどなぞる行為である. ある人を永遠に失われた者と断定することは、人が他者に対して持ちうる能力や道徳的権威を超えているが、ここで指摘されているのはそのことではない.

イザヤ書において物事を逆さまにする者たち——これは、イザヤが別の箇所を闇を光と呼び、また光を闇と呼ぶこととして指摘している事態を、単に別の言い方で表したにすぎない——は、彼らの最終的な裁きが示される中で、エルサレムを治める長老たちとして示されている.

悪を善と呼び、善を悪と呼ぶ者たち、暗闇を光とし、光を暗闇とし、苦いものを甘いものとし、甘いものを苦いものとする者たちに、災いだ.

自分の目に賢い者、自分の目に分別ある者に、災いだ. ぶどう酒を飲むことにかけては強く、強い酒を混ぜ合わせることに力ある者たちに、災いだ.

彼らは賄賂のために悪者を義とし、正しい者からその義を取り上げる. それゆえ、火が刈り株を食い尽くし、炎がもみ殻を焼き尽くすように、彼らの根は腐れとなり、彼らの花は塵のように舞い上がる. 彼らが万軍の主の律法を投げ捨て、イスラエルの聖なる方の言葉を侮ったからだ. このゆえに、主の怒りはその民に向かって燃え上がり、主は御手を彼らに伸ばして彼らを打たれた. 山々は震え、彼らのしかばねは街路のただ中で引き裂かれた. それでもなお、主の怒りはまだ収まらず、その御手はなお伸ばされたままである. 主は遠くの国々に旗を掲げ、地の果てから彼らを口笛で呼び寄せられる. 見よ、彼らはたちまち速やかにやって来る. イザヤ書 5:20-26

神の旗じるし（十四万四千人）は、間もなく到来する日曜法のときに旗じるしとして掲げられる. そのとき「主の怒りがその民に向かって燃え上がり」、主は「御手を彼らに伸ばし」、「彼らを打ち」、「彼らの死骸は通りのただ中で引き裂かれる」. ここでいう通りのただ中とは、エゼキエル書九章の滅ぼす御使いたちに、「行って打て. 目を惜しむな、あわれむな. 老いも若きも、処女も、幼子も、女も、ことごとく打ち殺せ. ただし、印のある者には近づくな. わたしの聖所から始めよ」と命じられるときの、エルサレムの通りのことである. 「そこで彼らは家の前にいた長老たちから始めた.」エゼキエルの「長老たち」は、ホワイト夫人によれば本来民の守護者であるはずの者たちであり、彼らはイザヤ書二十八章と二十九章に出てくる、物事をひっくり返す「エフライムの酔いどれ」である.

第5章では、彼らは「ぶどう酒を飲むことに強く、強い酒を混ぜ合わせることに力ある者、報酬のために悪しきを義とする者」である. 『Questions on Doctrine』の刊行によって、古老たちは背教的プロテスタンティズムの杯から飲み、人は聖化されえず、キリストは私たちの身代わりではあっても模範ではないと主張する義認の偽りの福音を提示した. こうして、その書は、背教的プロテスタンティズムの墮落した諸教会に受け入れられ

るという報いのために、悪しき者を義とした。その箇所は彼らに対する最終的な裁きを指し示しており、その裁きの理由は、彼らが「イスラエルの聖なる者のことばを侮った」からである。彼らは、「裁きの時の叫び」を上げた者たちが提示した「the daily」の理解を拒み、また背教的プロテスタンティズムの杯から飲むことによって、こうしたことを行った。

そのくだりでは、彼らは甘いものを苦いものに、苦いものを甘いものに変えてしまう。天使が降りてくるとき、その手にあるメッセージは甘いのが、そのメッセージの結末は苦い。彼らは、天使が降りてくるときに始まる真の「後の雨」のメッセージは苦いのだと主張し、終わりには甘い偽りの「平和と安全」のメッセージを掲げる。なにしろ、彼らは物事をひっくり返さずにはいられないのだから。

この罪が示されている箇所は、彼らの共同体としての恩恵期間の終わりに当たる。したがって、異教のサタンの働きをキリストの働きと同一視するという彼らの行為は、赦されない罪、すなわち聖霊の働きをサタンの働きと同一視することに対する預言的な並行であると見るのが適切である。「偽り」をアドベンチズムの第三世代に持ち込んだことは、彼らの偽りの後の雨のメッセージの基礎的な論理を与え、最終的に彼らに強い惑わしをもたらす。ミラーが「the daily」の正しい意味を理解したまさにその箇所で、彼らが打ち倒されるさまが描かれている。

どんな手段によっても、だれにもだまされてはなりません。まず背教が起こり、そして罪の人、滅びの子が現れなければ、その日は来ないのです。この者は、神と呼ばれるもの、礼拝されるもののすべてに反抗して自らを高くし、神の宮に座して、自分こそ神であると自らを示します。私があなたがたと共にいたとき、これらのことを話したのを覚えていないのですか。いま、彼が自分の時に現れるために、それを妨げているものが何であるかを、あなたがたは知っています。不法の秘義はすでに働いています。ただ、いまはそれを抑えている者がおり、その者が場から取り除かれるまで、抑えているのです。そのとき、あの不法な者が現れるでしょう。主はその口の息によって彼を滅ぼし、ご自身の来臨の輝きによって打ち滅ぼすでしょう。この者は、サタンの働きに従い、あらゆる力とするしと偽りの不思議をもって来ます。また、滅びる者たちに対しては、不義のあらゆる欺きとともに来るのです。彼らは救われるために真理を愛する心を受け入れなかったからです。それゆえ、神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされます。こうして、真理を信じずに不義を喜んだ者たちは皆、さばきに定められるのです。テサロニケ人への第二の手紙 2:3-12。

預言者たちは、それ以前のいかなる聖史よりも「終わりの日」について多く語っており、この箇所もそのとおりである。ミラーの「知識の増加」の土台は、1989年に到来した「知識の増加」の土台でもある。なぜなら、「the daily」に関わる預言史を正しく理解することは、ダニエル書11章40節と41節の歴史を説明しているからである。すなわち、預言を学ぶ者が、異教の役割と教皇ローマに対するその預言的關係を理解していないなら、その者は、まず教皇権の台頭を抑え、その後に教皇権を地上の王座に据えるという働きが異教によって成し遂げられたことを認識できず、さらに、その働きが、はじめは教皇権を抑制するが、やがて変化してそれを地上の王座に据えるという黙示録13章の地から上ってくる獣の役割を型として表していることも認識できない、ということである。黙示

録13章の地から上ってくる獣の役割は、アメリカの将来として示されている。

次回の記事で、ヒデケル川の光の封印の解除についての考察を続けます。

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない。まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼らの忌むべき行いを喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」

イザヤ書66:3、4; テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12.

天の教師は問いかけた。「実際には世俗の方策に従って多くのことを行い、エホバに対して罪を犯しているのに、自分は正しい土台の上に建てており、神が自分の業を受け入れておられるのだと思い込むこと——これ以上に心を惑わす強い迷妄がほかにあるだろうか。ああ、かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違えるとき、人の心をとらえるのは、大いなる欺きであり、魅惑的な迷妄である。彼らは自分たちは富み、財にあふれ、何一つ必要としていないと思い込んでいるが、実際にはあらゆるものを必要としているのだ。」

衣を汚れのないままに保っている忠実なしもべたちに対して、神は変わっておられない。しかし、多くの者は「平和だ、安全だ」と叫んでいるが、その一方で、突如として滅びが彼らに臨もうとしている。徹底した悔い改めがなく、人々が罪を告白して心をへりくだらせ、イエスにあるとおりの真理を受け入れないかぎり、彼らは決して天に入ることはない。私たちの間に清めが行われるとき、私たちはもはや、富んでおり、財が増し加わって、何一つ必要がないと誇って、安逸に安住することはなくなる。

『私たちの金は火で精錬され、私たちの衣は世から汚されていない』と真実に言える者は、いったい誰か。私は、私たちの指導者が、いわゆる義の衣を指し示しておられるのを見た。それらを脱がせ、その下にある汚れをあらわにされた。すると彼は私に言われた。「彼らが自分たちの汚れと品性の腐敗を、いかに見せかけで覆い隠しているか、あなたには見えないのか。『忠信の都が、どうして淫婦となったのか！』わたしの父の家は商売の家とされ、神の臨在と栄光の去った場所となっている！

このゆえに弱さがあり、力が欠けているのだ。」 『証言』第8巻、249、250頁。